

研究ノート

高橋九郎・友二郎の企業者活動 (I)

ー神谷信用組合を中心にー

長岡大学教授 松本 和明

はじめに

周知のとおり、高橋九郎(1850～1922)は、新潟県三島郡来迎寺村神谷地域はもとより、県内を代表する地主ないし名望家、耕地整理や農業振興を推進した篤農家、衆議院議員を歴任した政治家、さらには地域社会の発展に貢献した篤志家等多方面にわたり活躍したが、このうち企業家としての側面はとりわけ重要であろう。九郎の企業者活動は諸活動の基盤となったのであり、九郎が主導した神谷信用組合の設立・展開過程を跡付けることは、九郎の人物像や高橋家の事績を考究するうえで必要かつ有意義といえる。

九郎の足跡については、当時の越路町が編集した『越路町史 資料編3 近代・現代』(1999年3月発行)および『越路町史 通史編 下巻』(2001年3月発行)でひととおり取り上げられている。佐藤公俊氏は、九郎とイギリス人社会研究家・改革家のシドニーおよびビアトリス・ウェップ夫妻との交流について立ち入って論じ、神谷信用組合の動向に関しても言及している¹。さらに、九郎の孫にあたる健吉氏が所蔵する同家の諸史料が東洋大学井上円了記念博物館に寄贈されたのを受けて、同大学の白川部達夫氏を中心とする研究グループにより、九郎や高橋家の諸側面の調査が進められている²。しかし、現時点では、神谷信用組合の実態が明らかになっているとはいえない³。

そこで、本稿は、九郎の企業者活動の要諦というべき神谷信用組合について、創業の経緯や事業構想および展開、業績ないし成果や事業姿勢を中心に考察することを課題とする。なお、研究途上のため、九郎が積極的に関与した神谷銀行をはじめとする銀行業および鉄道業・石油業・土地開発業や株式投資活動に関しては次稿にあらためたい。

I 神谷信用組合の設立過程

まず、明治後期から大正初頭における来迎寺村域の概要に関して、神谷信用組合が刊行した『十周年記念誌』に的確に叙述されているので、以下に引用しておきたい⁴。

(前略) 東北南の三方は信濃川及渋海川に包囲され、南方三島郡片貝村及古志郡石津村に接続す、長岡市を距る約二里半越後平野の起源地比も称すべき、概ね平坦の土地にして肥沃の米作地なり、故に村民の産業は大部分農業にして、副業として近時養蚕を飼育する者及漁業又は舟楫の業に服する者あるも之れ極めて僅少なりき、明治三十一年北越鉄道の開通と共に大字来迎寺に停車場が設置せられし為め、其の必要に迫られ旅館、商店、飲食店等の新設を見しも、付近一小部に局せられ産業上左程の変化を見ず、冬季降雪多量の土地なれば、

¹ 佐藤公俊「神谷信用組合と産業組合ー高橋九郎の挑戦とウェップ夫妻の長岡調査、日本の農協の源流ー」『長岡工業高等専門学校研究紀要』第46号、2010年。

² 発行者・研究代表者白川部達夫『近世・近代の地域社会と名望家』I・II(東洋大学井上円了記念助成・共同研究報告書)2013および2014年2月。

³ 吉原靖九氏『神谷信用組合の歩いた40年～事業報告書で綴る産業組合小史～』「神谷信用組合の歩いた40年」出版委員会、2001年は貴重な業績で、熟読玩味に値する。

⁴ 『越路町史 資料編3 近代・現代』342頁。

壮者は秋収後より春季融雪期迄、概ね群馬、栃木、長野方面へ出稼するを例となす、農業本位の区域内経済の首脳は言ふ迄も無く、農業収益を基礎とし出稼賃金を以て補足するが故に、耕作地の分配上より見るも貧弱なる部落とも称し難きも、三方川を以て包囲せられある地勢として水害予防に要する経費決して少なしとせず、加之ならず時に非常の洪水ありて秋収を皆無に帰せしむるが如き惨状を呈することあり、近く明治二十九年、三十年及昨大正三年の洪水の如きは其实例なりとす

すなわち、来迎寺村は、春～秋期は稲作を中心とする農業、冬期は他県への出稼により生計をたてるという新潟県においては一般的な農村地域であった。一方で、村内への北越鉄道（現・JR 信越本線）の敷設と度重なる水害は地域の命運を左右した。九郎が地域での信用組合の創設を構想したのもこれらが大きな契機となったのである。

1896（明治 29）年に来迎寺村域で着手され 98 年まで続いた北越鉄道の敷設工事は、地域住民に雇用と現金収入をもたらした。しかし、この恩恵に浴した住民の多くは「貯蓄機関は遠く片貝若くは長岡に行くに非ざれば得べからず、従て貯蓄思想の如きは甚だ薄弱」であったばかりでなく、「只徒らに奢侈の弊風と徳義の廢頹とを招き質実朴厚たる美風は輕佻浮薄の惡風に化せんとするの傾向」⁵に陥っていた。

一方で、96 年および 97 年は水害に見舞われ、人的・物的被害は甚大であった。これらからの復旧・復興および生活再建を進めるべく、地域住民は総意として祭礼・祝賀を 3 年間取りやめて儉約を励行した。これの成果は大きく、かつ住民の不斷の努力により復旧・復興は進展をみせたものの、「人情の弱点として咽喉元過ぐれば熱さを忘るゝの例に漏れず各自の経済状況回復と共に、一度感染したる奢侈、浮華の惡風は再び其芽を萌」す状態となり、「救済の策実に焦眉の急を要」⁶する事態となった。

こうした状況を深く憂慮した九郎は、「信用道德の尊重すべきを知らしむると共に奢侈放逸の弊風を矯正し、共同協力、勤儉貯蓄の良風を涵養せしむる外なし」⁷と貯蓄思想や勤勉性の啓発および地域への資金供給の円滑化を目指して、金融機関の立ち上げを志向した。九郎は関係者とともに調査・研究を進め、資本金 5 万円程度の銀行の設立や無尽講の結成を構想したものの実現には至らなかった。この間、旧知の平田東助が中心となって制定された産業組合法（信用・販売・購買・生産利用組合の設置）が 1900（明治 33）年 9 月に施行されたのを受けて、信用組合組織の創設を決意した。

九郎は、新潟県関係者や新潟県農会および新潟成資信用組合等の調査を重ねて事業研究を推進したうえで、新潟県知事に設立認可を申請した。同申請は 1904（明治 37）年 3 月 25 日に認可され、翌 4 月 15 日に有限責任神谷信用組合として設立登記が完了した。こうして、神谷信用組合が呱呱の声をあげることとなったのである。新潟県内において産業組合法に基づき認可を受けた組合としては、南蒲原郡三条町（現・三条市）で 1901 年 2 月 21 日に認可された有限責任三条成産信用組合（現在の三条信用金庫のルーツ）に次いで 2 件目であった。事業は 4 月 17 日から開始された⁸。

神谷信用組合の目的としては、「組合員ニ産業ニ必要ナル資金ヲ貸付シ及貯金ノ便宜ヲ得セシムルコト」、「組合員ニ経済ノ発達ニ必要ナル資金ヲ貸付シ及加入予約者、組合員ト同一ノ家ニ在ル者、公共団体又ハ営利ヲ目的トセサル法人者ハ団体ノ貯金ヲ取扱フコト」（定款第 1 条）と掲げられた。組合員および加入予約者は、来迎寺村内に居住し独立した生計を営む者に限るとの条件が付されている（定款第 6 条）。

初代理事長には九郎が就任した。他の役員は次のとおりである。

理事：高橋逸平（専務理事）・山本仁七郎・水島惟孟・高橋三郎

監事：平沢浅太郎・山崎慶次郎・笠井繁次郎

信用評定委員：白井熊五郎・高橋定七・白井七郎次・山岸治平・郷熊太郎

理事会は必要に応じて毎月 1 回以上開催し、重要事項の協議と事業経営および経済状況の調査・研究をおこな

⁵ 神谷信用組合編纂『創立三十周年記念誌』保証責任神谷信用組合、1934 年、3 頁。

⁶ 同上書、4 頁。

⁷ 同上。

⁸ 前掲『越路町史 資料編 3 近代・現代』344 頁。

った。監事は、毎年 2 回以上の頻度で諸帳簿・担保品および貸付金額の対照監査業務を担った。

信用評定委員は、毎年 3 月に定例会を開催し、組合員の個別の信用状況について、資産（所有地価・所有有価証券・所得税額・所得額・建設物・貸借金）および素行（家族円満・勤儉貯蓄・約束履行・誠実）を中心に調査して「信用程度表」を作成しており、これが組合事業の基盤となり、組合の堅実経営を支えていたと考えられる。

高橋逸平は、1877（明治 10）年 5 月に難波政五郎の次男として生まれ、婿養子として九郎の妹のスミ（1880 年 2 月生）と結婚し分家したとされる⁹。逸平は 1918（大正 7）年 1 月に来迎寺村会議員に就任し（22・30 年も当選）、23 年 3 月 11 日に宮川外新田・道半・突切島の 3 字が合併して「神谷」となった際には初代惣代（後の区長）および協議員に就いた。さらに 25 年 4 月に来迎寺村長に就任し 29 年まで務めた¹⁰。

水島孟惟は、1862（文久 2）年 3 月 2 日に道半で生まれ、1887 年から 97 年に三島郡浦村村長、1902（明治 35）年 1 月に来迎寺村会議員となった（08・14 年も当選）。さらに 1907 年の新潟県会議員選挙で三島郡選挙区から政友会の推薦を受け立候補して当選を果たし、11 年まで務めた。1915（大正 4）年 3 月 7 日に 54 歳で死去した¹¹。

郷熊太郎は、来迎寺村助役を経て、1912 年 5 月に同村長に就任し、15 年 12 月まで務めた。その前任者が九郎で、1908 年 2 月から 12 年 4 月まで在職した。白井七郎次は神谷惣代（第 3 代）と神谷区協議員、白井熊五郎は神谷区協議員を務めている¹²。

なお、平沢浅太郎は 1922 年 1 月、九郎と山本仁七郎は 20 年 1 月、笠井繁次郎は 19 年 10 月、白井七郎次と郷熊太郎は 16 年 1 月、山岸治平は 14 年 3 月、高橋定七は 06 年 1 月、高橋三郎と山崎慶次郎は 05 年 1 月まで務めた（高橋逸平と白井熊五郎は 1934 年 11 月時点で在任）¹³。

組合の名称は、中世以来来迎寺村域が「紙屋荘」の荘域であったことにちなんで名付けられた。組合の事務所は、来迎寺村大字宮川外新田 99 番地の高橋逸平宅におかれた。実務は逸平一家が総出で取り扱ったという。業務には複式簿記を導入し、現金出納では先ず伝票をおこして記帳・検算をおこない、日々の収支計算により各科目の日計表を作成して、組合の資産・負債の状況を把握するという近代的な体制を確立した。

1904 年 4 月 17 日の貯金開始日には出資 1 口に最大 40 円、最小 2 銭が払い込まれて総額は約 1,000 円、翌 18 日分を合わせると出資額は 2,000 円以上となった。また、貸付は 19 日から開始されることとなり、「同組合は一円以上の出資払込者に十円以上の貸付を行ふよしなれば、組合員の便利多大にして、県下の模範組合たるべし」¹⁴と報じられている。

組合設立当初は、「産業組合法発布以来日尚ほ浅く組合思想の普及せざるは勿論、僻遠なる農村民は其事業の性質すら解せざるの状態」で、「之が企画を聞くや却りて之に反対し資産階級が細民より零碎の資金を低利に預り高利に運転せしめんとする一種変体なる営利会社の如く誤解せるもの少からざりき」¹⁵状況であった。これに対して、九郎は私財 50 円を投じて資金融通を円滑化させるとともに役員および職員（書記 2 名）を率いて組合の趣旨の普及および加入と貯金の勧誘を無報酬で推進した。一方で経費の節約にも意を注いで、事業基盤の確立および組合員の利便性の向上に尽力した。

初年度末の 1904 年 12 月 31 日時点では、組合員が 185 名、出資口数・金額が 423 口・4,230 円に達した。組合員・出資口数の構成は農業が 157 名・356 口と最も大きく、大工が 12 名・22 口、雑商が 8 名・18 口、酒造が 3 名・17 口、桶工が 2 名・7 口、木挽・左官・船乗が各 1 名・1 口であった。地域の産業構造に添うものといえる。

貯金は預り高・人数が 1 万 2,853 円 87 銭 8 厘・73 名、払戻高・人数が 8,345 円 17 銭 7 厘で現在高は 4,501 円 70 銭 1 厘（利子は年 6%）、貸付金が 5,599 円（利息は日歩 2 ないし 3 銭）、剰余金つまり当期の利益金は 40 円 57 銭 3 厘であった。

⁹ 内尾直二編輯『人事興信録 第四版』人事興信所、1915 年、た 64 頁、明治大学附属中央図書館所蔵。

¹⁰ 高橋友二郎『神谷略誌』1986 年、73～74、85、107～109 頁。神谷区事務所所蔵。

¹¹ 新潟県議会史編さん委員会編『新潟県議会史 明治編二』新潟県議会、2002 年、1507 頁。

¹² 註 10 と同じ。

¹³ 前掲『創立三十周年記念誌』8～10 頁。

¹⁴ 『新潟新聞』1904 年 4 月 19 日（前掲『越路町史 資料編 3 近代・現代』244 頁）。

¹⁵ 前掲『創立三十周年記念誌』5 頁。

神谷信用組合の『第一年度事業報告書』は、初年度について「設立以来茲ニ九ヶ月ノ短日月ニ於テ、百五拾円余ノ創業費、拾九円余ノ經常費ヲ控除シテ、猶ホ且ツ多少ノ剰余金ヲ見ルニ至リシハ、慥カニ信用組合ノ主旨組合員全般ニ普及シ、組合員相互ノ信用鞏固ナルノ一証トシテ、見ルコトヲ得ベシ」¹⁶と好調な状況を報告している。

II 神谷信用組合の事業展開－1900年代－

九郎は、引き続き率先垂範して役職者とともに組合への加入・貯金を熱心に勧誘した。貸し出しは綿密に調査した上で低利をもって実施し、後に対人信用による無担保融資も開始した。勤儉・貯蓄思想の啓発・啓蒙を進めるための講演ないし講話会や活動写真・人形劇の上演、さらに旅行会を開催した。九郎をはじめ首脳陣は、頻繁に組合員を訪問して交流を深め、誠実な姿勢を貫いて熱心に業務に取り組んでいった。

通年での事業展開となった 1905 年度末において、組合員数は 230 名、出資口数・金額は 523 口・5,230 円、貯金高は 6,284 円 59 銭 6 厘（利子は年 6 ないし 6.5%）、貸付金は 9,812 円、剰余金は 704 円 84 銭 3 厘とそれぞれ拡大した¹⁷。

神谷信用組合の事業展開について、『高橋九郎翁』には次のように叙述されている¹⁸。

翁（高橋九郎：引用註）始め発起者一同献身的態度を以て之が趣旨の普及に努め、且役職員の如き総て無報酬にて誠実熱心以て事業を經營し、時に或は組合資金欠乏を告げたる場合の如き、組合長たる翁は私財を一時貯金を附して之が融通を円滑ならしむる等成る可く経費を節約して只管組合員の利便を図らむことに之れ努む。又諸会講及び上方見物善光寺参詣希望者等にも、貯金の必要なるを勧説して加入せしむる事とし、年と共に事業の進展を図りたり。

翁等は此の如く之を奨励すると同時に、其貸出に際しては信用程度表を標準とし其用途の調査は頗る厳密を極め、仮令組合に遊資あるも漫に計数上の利益を図りて貸出を急ぐが如きは、蓋し翁の執務者に対して深く警戒する所なるを以て、役員も此意に体して決して苟もすることあらざりき。一方利率は可成的低率として普通銀行と比すれば常に日歩四五厘の低下を以てせり、又組合員の組合を利用するの度逐年盛なると共に信用道徳も大に深厚を加へ来りしを以て、明治四十五年より当座貸越を開始し、小切手使用を実施せしに繁雑と錯誤を省略し彼我大に利便を感じるに至れり。貸出に就て本組合の最も誇るべきは、絶体に対人信用に依れること金額の如何に拘らず総て無担保貸付なること利率の低利なること等にして、而も設立以来未だ勝手會で延滞者及び貸倒れ等の無きを特色とせる而已ならず、常に貯金の豊富なるが故に資金に不足を生ずる事なく、従て設立以来未だ一度も借入金を為したる事無しと云へり。

1906（明治 39）年 9 月 1 日には、事業の拡大に対応するために、高橋逸平邸内に新たに木造家屋平屋建 1 棟および倉庫 1 棟を新築し、新事務所として業務を開始した。

翌 07 年 1 月 26 日に村立外新田尋常小学校で神谷信用組合の総会が開催されたことが、『新潟新聞』に報じられた。出席した組合員は 238 名におよび、委任状提出者は僅か 9 名であった。九郎による事業報告や新潟県属の藤井当平および三島郡長の稲田甫吉により講話がなされた。同紙は役職員と組合員の熱心な取り組みを伝えている¹⁹。

（前略）午後五時閉会、夫れより組合員各自の配当金を払渡せしが、配当金は払受くと共に、直ちに貯金として組合へ預け入るゝの有様にて、組合役員は点灯後に至るも尚熱心事務を取扱い、組合員の便宜を計れり、当日は古志郡書記横山惣八氏は事業視察として来会され、講話の際は組合員外の有志者は、寒気を冒して場外

¹⁶ 有限責任神谷信用組合『第一年度事業報告書』（前掲『越路町史 資料編 3 近代・現代』244～247 頁）。

¹⁷ 神谷信用組合の業績については、武藤嘉一編纂『高橋九郎翁』産業組合中央会新潟支会、1924 年の付表のデータに依拠している。

¹⁸ 同上書、29～30 頁。

¹⁹ 『新潟新聞』1907 年 1 月 29 日（前掲『越路町史 資料編 3 近代・現代』248 頁）。

に傍聴せしもの多数あり、非常の盛況なりしと云ふ

1910 (明治 43) 年には、組合の徽章を制定することとなり、九郎の発案により、信の字を打出の小槌に擬したものとするのを決定した。

九郎は、事業が徐々に軌道に乗るなかでも、役職者および職員を主導して旺盛かつ主体的に取り組みつづけた。事業開始後 8 ヶ年が経過した 1911 (明治 44) 年 12 月 31 日時点の業績を 1905 年と比較すると、組合員数は 2.1 倍の 487 名、出資口数・金額は 1.9 倍の 1,013 口・1 万 130 円、貯金高は 10.7 倍の 6 万 7,430 円 20 銭 9 厘、貸付金は 2.4 倍の 2 万 3,705 円、剰余金は 3.0 倍の 2,103 円 31 銭 2 厘となり、業績は順調に向上していた。また、準備金が 4,440 円 67 銭 3 厘、特別積立金が 2,256 円 90 銭 1 厘および預け金が 5 万 7,300 円、有価証券が 4,454 円計上されていた。貯金利子は年 5.28% ないし 6%、貸出利息は日歩 2 銭 3 厘であった。当該年度の事業動向については、神谷信用組合の『第八年度事業報告書』に詳細にわたり報告されている。やや長くなるが以下に引用しておくこととしたい²⁰。

(前略) 主トシテ産業組合ノ普及発達ヲ計リ、組合員新加入ヲ勧誘シ、進ンデハ組合員ヲシテ精神的訓育ニ力ヲ致シ、忠実勤勉各其職務ヲ励ミ、以テ産業ノ発達ト改良トヲ謀ルニ勉メ、又貯蓄心ノ涵養ニ資スル為メ、貯金利率ハ勉メテ年五分式厘以上ノ高率ニテ預リ、以テ産業組合ノ本旨ト貯金思想トヲ誘起セシメタリ、貸付金利率ニ於テハ、世上金利ノ如名ニ拘ハラズ、組合資金ノ充実スルニ伴ヒ年々其利率ヲ引下ゲ、本年度内ハ日歩式銭参厘ヲ以テ、産業資金ヲ遺憾ナク組合員ニ供給セリ

(中略) 年々預金ノ増加セルハ、常ニ貯金ノ奨励ニ勉メタル結果ニ外ナラザリシト雖モ、亦産業組合ノ本旨ト貯蓄思想トノ発達セルニヨルコトハ信ズルナリ

金融上ニ付キ概述スレバ、前年度引続キ一般金融界不振ノ状況ヲ受ケテ我組合ノ如キハ、殊ニ余裕金ノ運用ニ苦痛ヲ成シツトアリシガ、本年四月ヨリ是等金融ヲ円満ナラシムル為メ、中越信用組合連合会ノ設立アリシモ、創立早々ノ連合会ナレバ、未ダ十分ノ満足ヲ得ル能ハザリシハ、聊遺憾トスルトコロナリ、然レドモ我組合ハ幸ニ貯金高ノ追々増加セシト、又秋期ニ至リ金融上稍活気ヲ呈スルト共ニ、預金利子ニ於テ毫、式厘方引上グノ状況ト相成リ、旁持分ニ対スル年々割式分四厘余ノ剰余金ヲ得ルノ成績ヲ見ルニ至リシハ、幸福ト云フベシ

この間、1904 年 1 月 26 日には設立七周年記念祝賀会を挙行了。1907 年には監事を 2 名増員するとともに専務理事を廃止して書記を 1 名増やして体制を強化した。

III 新潟県内および全国組織との連携関係の確立および強化

次に、新潟県内および全国の産業組合組織との連携について述べていきたい²¹。

1905 (明治 38) 年 3 月に産業組合の普及と組合間の連携強化を目的として大日本産業組合中央会が創設され、平田東助が会頭に就任した。中央会は同年 5 月に全国農会 (後の帝国農会) の幹旋を得て全国産業組合協議会を東京赤坂溜池にて開催し、新潟県を代表して九郎が出席した。これに際し、九郎をはじめ県内の地主有志が同会へ 50 円の寄付をおこなっている。

同年 8 月 3 日には、神谷信用組合および沢海生産販売組合・新潟成資信用組合・新潟購買組合が中心となり、県内で既設の 54 組合へ呼びかけて、産業組合の改善・発達を目的として新潟県産業組合協議会を創設した。九郎および林静治 (新潟成資信用組合理事長)・小野塚弥正 (新潟購買組合理事) が幹事、新潟県農会幹事の斎藤善太

²⁰ 有限責任神谷信用組合『第八年度事業報告書』(前掲『越路町史 資料編 3 近代・現代』249~250 頁)。

²¹ 本章における史実および史料は、特に断らないかぎり、武藤嘉一編輯『新潟県産業組合史』産業組合中央会新潟支会、1925 年に拠っている。

郎が主任幹事となった。同会は具体的な事業として、「産業組合ノ趣旨ヲ普及シ其設立並ニ組合員加入ノ奨励ニ関スルコト」、「組合相互ノ事業ノ連絡及組合ノ改良進歩ヲ企図スルコト」、「組合事業執行上便宜ヲ得セシムルコト」を掲げた。さらに、大日本産業組合中央会と連携を強化すること、同会が道府県域の支部組織を整備するにあたっては支部を設置することも決定されており、注目に値する。なお、同月中には、新潟県農会が農商務省技師の有働良夫を講師として産業組合講習会を5日間実施している。

翌06年7月27日に新潟県産業組合協議会は総会を開催し、大日本産業組合中央会新潟支会へと改組することを決定した。会長に九郎、副会長に富永孝太郎（至誠信用組合組合長）、理事に林静治と斎藤善太郎および桜井市作（新潟成資信用組合理事）と伊藤九郎太（沢海生産販売組合組合長）が就任した。新潟県知事の阿部浩と新潟県第三部長の佐柳藤太、新潟県農会副会長の山田平太郎、新潟県地主協会副会頭の真島桂次郎が顧問となった。同総会へは中央会会頭の平田東助等も出席している。

その後、1909年4月に産業組合法が改正され、中央会に法人格が付与されることとなり、翌10年1月に産業組合中央会となった。新潟支会は直ちに改組への手続きに入り、同年3月には全国7番目の支会として産業組合中央会新潟支会の創設が認可された。会長は引き続き九郎が務めた。新潟支会は中央会との連携をより強化しつつ、「時運の要求を県当局の援助とに依り、基礎漸く鞏固を加へ會員の増加となり事業の拡張となり、以て能く県下産業組合奨励指導の唯一機関として活動」していった。

九郎は、新潟県内各地域での産業組合の相互連携と事業の効率化および拡充を推進すべく、1911（明治44）年2月1日に長岡市域と古志・三島および北・中・南魚沼郡域を対象区域として中越信用組合連合会を組織した。九郎は会長に就任し、事務所を神谷信用組合内に設置した。1913（大正2）年には刈羽郡域も加えられた。この間、11年中には中蒲原・北蒲原・南蒲原の3郡域で信用組合連合会が立ち上げられた。これらをふまえて、産業組合中央会新潟支会も1914年に郡域ごとに部会をおくことを決定し、翌15年から16年にかけて各郡で創設された。県下の産業組合をきめ細かく組織化したことで、事業基盤の強化と新たな起業が促されたのである。

九郎を中心とした「熱心画瘁は地方斯業の興隆を促進せしめたりしは言を俟たず」、「其熱誠は中央斯界に於ても深く認むる所と為り」、「其進歩に於ては当時全国有数と称せられ」、「名流貴縉の来越するもの頻繁を加へ」るところとなり、「随て翁の事業の如きは地方に於ける一名物たるかの観あり」²²と九郎の活動は高く評価された。

神谷信用組合は、1909年4月に大日本産業組合中央会から第5回全国産業組合大会で、翌10年7月に中央会新潟支会から第5回総会で成績優良組合として表彰された。同年1月には岡村利七が新潟支会から善行組合員として表彰されている。

さらに、1913年5月には産業組合中央会から、普通表彰組合で5ヶ年以上経過し、なお事業成績が最も顕著な組合を選抜して授与される「特別表彰」の荣誉に輝いた。表彰とともに恩賜財産から250円が授与された。もとより新潟県内初である。九郎はこれをもって「恩賞記念基金」を創設することを決した。神谷信用組合は定款を改正して、これを特別会計として設定し、基金と果実収入は通常は積み続け、総会決議を経て善行者表彰・罹災者救済・その他公共事業の費用のみに活用することとした²³。

九郎の産業組合の発展への長年の貢献に対して、産業組合中央会から1915年に紅綬功労章および金盃、18年4月には紫綬功労章を受けた。なお、神谷信用組合および中央会新潟支会理事の藤井当平も19年4月に紅綬功労章を授与されている。

ここで注目すべきは、内務省地方局が1907（明治40）年3月に編纂・発行した『地方自治要鑑』に神谷信用組合が取り上げられていることである²⁴。同書は「地方特種の経営と其意気精神とに至りては尚ほ未だ悉さるもの」が多く、これらを「普く全国に亘りて仔細に之を査察し施設経営の同じく伝ふべきものに就いて総て之を網羅」した、つまり全国各地の発展の諸主体による数々の先進事例を紹介したものである。同書は「地方の経営は頗る多端にして之が監督指導の責ある者固より更に奮て其道を悉くさるべからず若し之に依りて各自多少の

²² 前掲『高橋九郎翁』41頁。

²³ 前掲『創立三十周年記念誌』13頁。

²⁴ 長岡大学松本研究室所蔵。

資する所を得一般の世人も亦之に依りて省発する所あるを得ば本書輯成の業や蓋し世に裨益なしとせず」と先進事例に学ぶことの意義を強調している。神谷信用組合が掲載されたのは、その先駆性はもとより、新潟県や中央会および内務省ないし政府との関係が緊密で、関係者間で広く知られていたことも理由であると考えられる。その文面を紹介しておこう (197頁)。

新潟県三島郡の来迎寺村の如きは、よく其の効を収めたるものゝ一なり。同県下に於ける信用組合は、目下五十有余あり。其中にも此村の信用組合は、第一として挙げらるゝ所たり。初め鉄道の開通するや、停車場は此村に設けられずして、稍々隔たりたるの一地に置かれしかば、此のまゝにして推し行くときは、村として復た当時の位地を保つに由なし。村の篤志者高橋九郎なるもの、此に顧みる所あり、信用組合を組織して村民不時の備に供せんとし、百方勧誘して組合員を募り、竟に今日の盛を致せり。組合の信用今や漸く固くして、村民も一般に貯蓄心に富み、組合員の以外なる車夫、車力、木賃宿の主人すら、別に相約して『一銭講』なるものを設け、毎日一銭づゝ貯蓄して、之を九郎に依頼して、総て此の信用組合に預金するに至れりといふ (中略) 一銭講の如き小組合も亦積んで鉅万を成すの本たるを見るべし。

他方、中央会新潟支部は、1917 (大正6) 年5月14日に県内の全組合を組合員一人あたりの貯金額 (16年12月末現在) で順位付けを施した「番付」を発行している。トップである東方大関は長岡信用組合 (長岡市: 417円97銭)、続く西方大関は七日市信用組合 (三島郡: 269円45銭) で、上位10組合のうち9組合が中越地方の組合であった²⁵。神谷信用組合 (159円41銭) は第3位で、本来は東方大関に位置づけられるところであるが、新潟成資信用組合 (33円42銭) とともに「行司」となっている。両組合は県内における草分け的存在であり、別扱いにしたと思われる。

同番付には「第八次」と記載されており、複数回発行されたとみられる。県内組合をランク付けすることにより、業績の向上にむけてのモチベーションの高揚とともに地域での認知の拡大を目指して発行したものと考えられ、ユニークな試みといえよう²⁶。

IV 神谷信用組合の事業展開—1910年代以降—

神谷信用組合は、九郎のリーダーシップと組合員および役職者の職務精励とが奏功して、持続的な成長を果たした。これによりその世評は年々高まり、全国に冠たる「模範組合」と称されるようになった。新潟県内はもとより全国から個人・団体の視察・調査が相次いだ。視察者ないし団体は産業組合をはじめ、中央会および農商務省、各地の市町村および議会・農会・農事試験場・農業学校・農工銀行の幹部や実務担当者など多岐にわたっていた。当時の状況について、次のように説明されている²⁷。

本組合は県下に於て比較的其設立早く、支会、連合会等の関係密なりしが故に、中央地方より斯業関係名士の視察来訪に接すること頻繁なり、更に又県下多数の組合若くは組合新設の希望者に対し常に指導者たる地位に立てるの観あるを以て四時其事業を視察せんとするもの多し、さらば坐らにして名士の訓示若くは指導奨励を受くることを得ると共に他の組合の長所、短所を聞くことを得て自得する処少なからず

²⁵ 長岡、七日市信用組合に続くのは、浜忠信用購買生産販売組合 (刈羽郡: 170円27銭)、北谷信用組合 (古志郡: 155円1銭)、日光信用生産販売購買組合 (北蒲原郡: 144円84銭)、横沢信用組合 (刈羽郡: 136円39銭)、上組信用組合 (古志郡: 135円51銭)、深沢信用組合 (三島郡: 132円76銭)、塚山信用組合 (刈羽郡: 129円5銭)、猫興野信用購買組合 (南蒲原郡: 121円94銭) であった。さらに千手町、中里信用組合が続く。

²⁶ 番付には、「天下泰平 家内安全」のほか、「汝自らを助けよ然らば神来つて汝を助けん」、「時間は金なり。信用は金なり。共同は金なり。」、「金は絶えず活動し且つ繁殖すべき性質を有す。」と付言されている。なお、同番付は長岡大学松本研究室所蔵である。

²⁷ 前掲『創立三十周年記念誌』31～32頁。

この一方で、九郎は、役職員や組合員に対して県内外の優良ないし先進的な組合への視察・調査や各種研修会・講習会への参加を奨励していた。特に藤井当平や水島義郎等が各地へ派遣された。水島は、1912年10月から12月にかけて約2ヶ月間おこなわれた中央会主催の第1回長期講習会に新潟支会の推薦を受けて参加している。関係者間の相互研鑽による事業スキル・ノウハウの蓄積と向上を目指したのである。

付表 1934年時点までの神谷信用組合の理事・監事・信用評定委員の変遷

氏名	役職・在任期間
岡村 義彦	理事:1905.1～10.3 および 29.2～31.11 (浦・2,868)
藤井 当平	理事:1911.1～
水島 義郎	理事:1916.1～29.1 (神谷・3,407)
高橋友二郎	理事(組合長):1922.1～ (神谷・12,735)
西脇 忠次	信用評定委員:1915.1～20.1
	理事:1920.1～ (浦・5,993)
平沢 軍平	監事:1922.1～32.2
	理事:1932.2～ (朝日・2,171)
西脇皆三郎	監事:1905.1～22.12
平沢 謙吉	監事:1906.1～ (浦・3,470)
佐藤佐太郎	監事:1906.1～21.11
笠井 卯八	監事:1920.1～ (神谷・3,229)
堀井次郎治	監事:1922.1～31.7 (飯島・6,652)
関 宗一郎	監事:1924.1～34.1 (浦・3,714)
山本 理吉	信用評定委員:1922.1～32.1
	監事:1932.2～ (西野・1,864)
金安 肇	監事:1932.2～ (飯島・5,405)
関 宗十郎	監事:1934.2～
山崎慶次郎	信用評定委員:1905.1～10.1
西脇 長松	信用評定委員:1905.1～14.12
関 弥市郎	信用評定委員:1906.1～23.4
堀井仁藤次	信用評定委員:1906.1～26.9
高橋定五郎	信用評定委員:1906.1～34.2
永井富一郎	信用評定委員:1910.1～
白井 亀蔵	信用評定委員:1915.1～30.1 (中沢・1,250)
長谷川長次郎	信用評定委員:1916.1～33.6 (来迎寺・1,970)
松井 貞吉	信用評定委員:1916.1～31.10 (朝日・1,058)
桑原 源一	信用評定委員:1920.1～ (浦・1,452)
山本伊忠次	信用評定委員:1924.1～30.1
堀井藤次右衛門	信用評定委員:1927.1～ (篠花・6,162)
山本恭二郎	信用評定委員:1930.2～ (西野・5,505)
白井 岩吉	信用評定委員:1930.2～
郷 虎三郎	信用評定委員:1932.2～ (朝日・1,311)
岡村 吉松	信用評定委員:1932.2～ (浦・1,789)
長谷川松次	信用評定委員:1934.2～
高橋重一郎	信用評定委員:1934.2～ (神谷・4,014)

出典：保証責任神谷信用組合編纂・発行『創立三十周年記念誌』1934年、8～10頁より作成。

註：カッコ内は、1929年時点の居住地区と所有地価額(単位・円)である(小林二郎編輯・発行『新潟県地価持銘鑑』1929年、402～405頁)。なお、高橋殖産合資会社(無限責任社員・高橋友二郎)が来迎寺村内で40,059円相当を保有している。

九郎は意気軒昂で組合運営を率い、1915（大正4）年5月16日に開催された十周年記念祝賀会では「恒心より恒産を生ず」と題して演説をおこなった。しかし、翌16年以降体調を崩し、その後養生に努めたものの、同年12月に産業組合中央会新潟支会会長、翌17年2月に中越信用組合連合会会長を退任した。さらに、1920年1月の第17回通常総会をもって、1904年の設立以来務めていた組合長を辞任し、顧問には就任したものの、物心両面を投じた産業組合事業の一線から退くこととなった。

ここで、神谷信用組合が初めて通年で事業を展開した1905年と1919年とでその業績を比較してみたい。組合員数は3.2倍の726名、出資口数・金額は2.6倍の1,382口・1万3,820円、貯金高は37.6倍の23万6,329円71銭、貸付金は6倍の5万8,413円4銭、剰余金は8.6倍の6,036円10銭となった。また、準備金が1万8,099円、特別積立金が6,583円29銭、預け金が19万9,490円91銭、有価証券が2万1,880円計上されている。貯金利子は年5.1%ないし6.6%、貸出利息は日歩2銭2厘ないし3厘であった。九郎を中心に役職員・組合員が日々尽瘁した成果といってよい。

ところで、付表は、1934（昭和9）年11月までの神谷信用組合の理事・監事および信用評定委員の在任者を示したものである。

笠井卯八は1918・25年、水島義郎は30・34・38・42・47・51年に来迎寺村会議員に当選した。1930年1月の村会議員選挙では、堀井藤次右衛門・平沢軍平・永井富一郎・郷虎三郎・桑原源一・西脇忠次・堀井次郎治も当選を果たしている²⁸。神谷惣代（後の区長）には水島（第5・7代）と高橋重一郎（第4代）が就いた。笠井と水島および高橋定五郎は神谷区協議員も務めている²⁹。

笠井卯八は、1874（明治7）年10月に、神谷信用組合設立時から監事を務めた繁太郎の長男として生まれた。1911年に家督を相続して家業の醸造業を継承した。1920（大正9）年8月に資本金50万円で神谷酒類醤油醸造として法人化をなし遂げ、代表取締役役に就任している。同年11月には、日本醸造会中部支部6県が主催、名古屋税務監督局が挙行した第6回酒類奨励品評会において、清酒の部でブランド名「富士田川」が1等賞、「歌川」が3等賞、醤油の部で「山三ツ星」が2等賞を受賞した³⁰。品質および技術力の高さを示す実績といえる。1923（大正12）年2月時点では高橋逸平が監査役に就いており、他に高橋権太郎と小森卯之七および片貝村の相崎弥市が取締役、佐藤菊次郎が監査役であったことが判明している。払込資本金は20万円であった³¹。26年1月時点では取締役が笠井・相崎および駒村清次郎、監査役が高橋逸平と佐藤で、資本金が35万円（払込済14万円）であった³²。30年4月時点では取締役が笠井・相崎および高橋権三郎・小森卯之七、監査役が高橋逸平と佐藤で、資本金が25万円（払込済20万円）となっており³³、業容および体制に大きな変化があったことが示唆される。笠井については「温厚重篤の性情と卓越せる業的才腕を以て、業務の向上発展に画し」、「誠に至誠一貫、実業界稀れに見る徳行の士」³⁴と評されている。また、九郎や平沢嘉勘治とともに三島郡における政友会の有力者であった³⁵。

ここで立ち入って取り上げる必要があるのは、平沢軍平・松井貞吉・郷虎三郎の関与である。この3名は、酒造家の平沢與之助・順次郎兄弟が1920（大正9）年5月に資本金50万円で設立した朝日酒造の役員に名を連ねていた。平沢軍平は與之助の義兄で、銀行勤務の経験がありビジネスおよび計数感覚に優れており³⁶、法人化や経営の近代化にあたり與之助・順次郎を支えた。設立時から1945年10月まで常務取締役、続いて専務取締役へ昇格して、同時に第3代社長に就任した平沢達夫（與之助の長男・京都帝国大学卒）をサポートし、52年12月まで在任した。また、軍平は1926・30年の来迎寺村会議員選挙で当選を果たしている。また、朝日惣代も務めた。なお、

²⁸ 『中越新報』1930年1月27日（前掲『越路町史 資料編3 近代・現代』328～329頁）。

²⁹ 註10と同じ。

³⁰ 『中越新報』1920年11月29日（前掲『越路町史 資料編3 近代・現代』349～351頁）。

³¹ 安藤仁隆編纂『銀行会社要録 第二十七版』東京興信所、1923年、新潟11頁。

³² 阿部直躬『日本全国諸会社役員録 第三十四回』商業興信所、1926年、下編238頁。

³³ 安藤仁隆編纂『銀行会社要録 第三十四版』東京興信所、1930年、新潟10頁。

³⁴ 日本風土民族協会編輯・発行『越・佐傑人譜』1938年、か23～24頁。

³⁵ 『越路町史 通史編 下巻』226頁。

³⁶ 朝日酒造株式会社社史編纂委員会編『朝日酒造七十年史』同社、1990年、22頁。

與之助の妻のナオは、神谷信用組合の設立時から監事を務めた平沢浅太郎の三女である³⁷。一方、松井貞吉は設立時から死去する1931年10月まで監査役を務めた。

郷虎三郎は、1890(明治23)年4月4日に、神谷信用組合設立時から信用評定委員を務めた熊太郎の長男として生まれた。朝日酒造の設立時から1957(昭和32)年まで取締役を務めた。この他、東越運輸(1921年設立)社長や越後製麺専務取締役、恵比寿製菓(1932年設立)取締役、片貝製糸場(1921年設立)・小千谷合同運送(1926年設立)監査役、新潟県乾繭共同販売利用組合長、さらに永井富一郎とともに来迎寺製糸工場(1929年設立)専務取締役を歴任した³⁸。1934(昭和9)年1月時点で、東越運輸(本社・長岡市城内町1丁目)は資本金10万円(払込済2万5,000円)で、取締役が岸五郎・高井忠八・田村市郎・羽賀栄五郎・高橋栄次、監査役が中山万蔵と青柳寅二であった。恵比寿製菓(本社・長岡市台町3丁目)は資本金15万5,000円で、社長が松倉源次郎、取締役に九郎の三男の亮三、監査役到来迎寺村の岡村徳吉(朝日酒造監査役や来迎寺実業協会副会長・来迎寺水道組合代表等も歴任)が名を連ねていた。片貝製糸所(本社・三島郡片貝村)は資本金12万円(払込済6万円)で、古志郡石津村の丸山佐忠次が取締役として参画していた³⁹。

郷については、「学業を卒へるや直ちに父業を継承して実業界に入り、その手腕を畏敬せらる」、「温厚の士にして覇気あり」、「近代型の紳商」、「数多の職にありてその天稟の才智を以て克く業務の発展を画しつつあり」⁴⁰と高く評価されていた。

郷は、1929(昭和4)年時点で、永井富一郎とともに三島郡政友会常任幹事を務めている⁴¹。1936(昭和11)年に来迎寺村長の平沢嘉勘次が辞任し、その後継者に推されたものの固辞した。平沢の後任となったのは高橋友二郎で、46年まで歴任した⁴²。

平沢・松井・郷の在住・在職する朝日地区は、同じ来迎寺村内でありながらも、神谷地区とは距離的に隔たりがある。彼らの参画は、姻戚関係や地域での政友会の領袖としての関係のみならず、九郎を中心とする人的ネットワークと神谷信用組合の事業展開の広域化が進展していたことを色濃く示すものであり、注目すべき史実といえる。

小括—高橋九郎の事業・経営姿勢—

これまで述べてきたように、高橋九郎の神谷信用組合の事業・経営に取り組む姿勢ないし方針は、一貫して堅実ないし着実かつ積極的であった。九郎はこれを「蛞蝓主義」と称し、以下のとおり言及している⁴³。九郎の企業者活動およびその基盤を示すものといえ、注目するに値しよう。これを引用して本稿をひとまず塞ぐこととしたい。

翁常に曰く吾産業組合は蛞蝓主義を以て進まざるべからず、蛞蝓は声も無く音も無く殆ど動かざるが如きも而も一度も退く事無く、至て穩健に着実に徐々進行を続けて倦むことなく終に目的地に到達せざれば止まざるものは是れ実に彼の発展に非ずや。吾産業組合も亦実に之に習ふて敢て躁急ならずや輕挙せず、一たび得たるものは決して之を失はず、屈せず撓せず克く困難を排し障害を除き、着々前進以て有終の美を済すの覚悟なくむばあらずと

(未完)

³⁷ 猪野三郎『大衆人事録 第十二版』帝国秘密探偵社・国勢協会、1937年、新潟19頁。

³⁸ 前掲『越路町史 通史編 下巻』338～339頁。

³⁹ 阿部直躬『日本全国諸会社役員録 第四二回』商業興信所、1934年、下編305、312頁。

⁴⁰ 前掲『越・佐傑人譜』こ24頁。

⁴¹ 前掲『越路町史 通史編 下巻』306頁。

⁴² 同上書、308頁。

⁴³ 前掲『高橋九郎翁』50頁。

【謝辞と付記】

本研究を進めるにあたり、高橋九郎の調査の必要性を御教示いただいた神谷地区在住で本学教授の高橋治道先生、さらに先生の御仲介のもとで御指導および講演の機会を与えて頂いた神谷区長の白井湛氏をはじめ地区関係者の方々に感謝を申し上げます。

本研究の内容は、2014年8月に開催された東洋大学共同研究「近世・近代の地域社会と名望家」研究会で報告させて頂いた。代表の白川部達夫教授および関係者の方々に御礼申し上げたい。

資料整理等にあたり、本学地域連携研究センターの近藤瑞恵さんに御協力頂いた。末筆ながら感謝いたす次第である。

本研究は、2012・13・14年度の「長岡大学個人研究費B」による成果の一部である。

